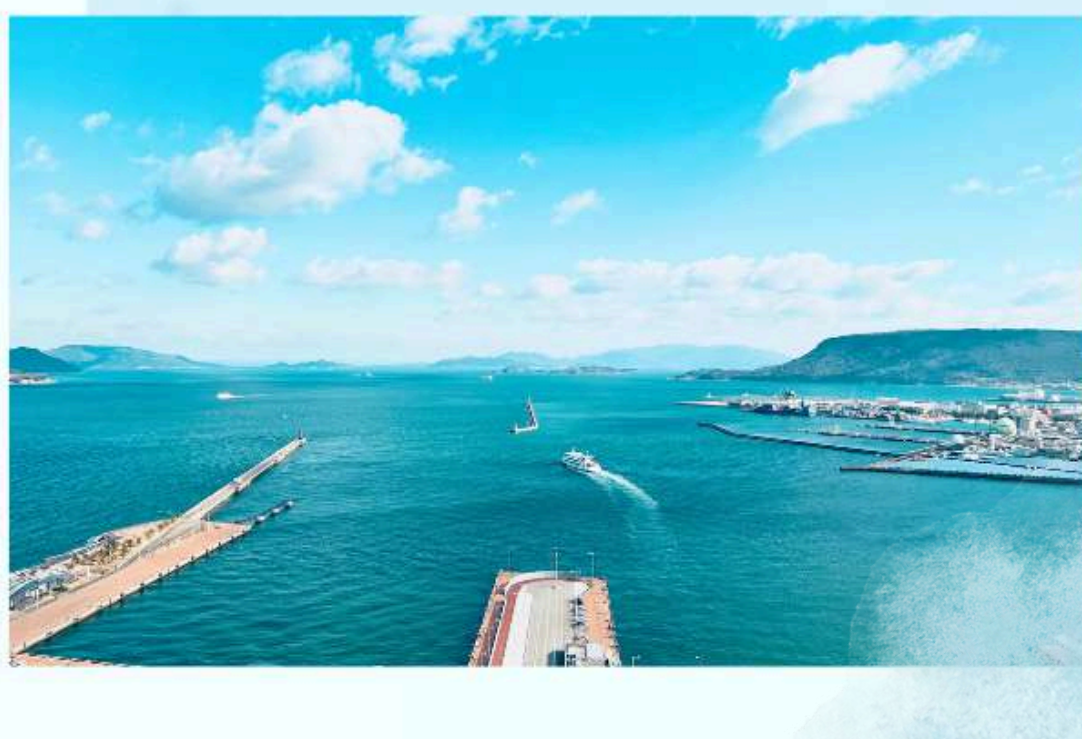
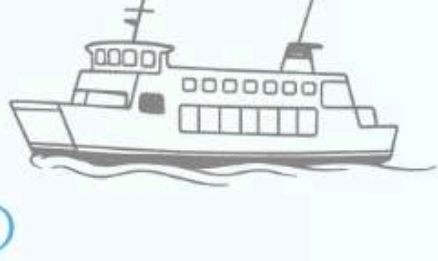


“挑戦”の先に 見えるもの

「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。



なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総陰はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一歩を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進むとすると、私たち自身も力をもってきました。

挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

シリーズ第4回となる今回は、前回に続き香川県東かがわ市・引田（ひけた）を舞台にお送りします。古くから人と文化が行き交うこの町で、私たちは2つ目の“挑戦”と出会いました。

瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）をきっかけに生まれたその挑戦は、町の記憶と人々の暮らしに寄り添いながら、今、息づきはじめています。そこには、地域の人々とともに未来を紡ぐ、ひとりのアーティストの姿がありました。

■消えゆく“井戸端会議”文化を、もう一度

かつての引田は、港と街道の交点として栄え、港に多くの船が集う商業の拠点でした。醤油や酒の醸造、和三益槽づくり、さらに明治以降は手袋製造など、多様な地場産業が花開きました。

白壁の商家や問屋が軒を連ね、蔵からは醤油や酒の香りが漂い、路地裏では荷馬車が行き交う——そんな風景の中、人々は店先で足を止め、自然と立ち話や情報交換の輪が広がっていました。

やがて昭和に入り、自動販売機や新しい店舗文化が登場しても、引田の町にはまだ暮らしと商業が一体となった温かな交流が残っていました。学校帰りの子どもが駄菓子を買いに立ち寄ったり、商店の前で出会った近所の人とおしゃべりをする、そんな日常の風景です。

しかし近年、少子高齢化と産業構造の変化により人口は減少し、若い世代の流出も進み、商店街は空き店舗が目立つようになりました。その時代の変化に伴って、かつては当たり前だった交流の光景も、その姿を変えつつあります。

そんな引田に今、ひとりの若きアーティストが新しい風を吹き込んでいます。それが、馬場悠輔（はば ゆうすけ）さん。

彼が挑んでいるのは、失われつつある“井戸端会議”文化を現代に再生することです。

■「ぐんだら家」——拠点がつなく、人と人、まちと未来

馬場さんの活動基盤となっているのが、「ぐんだらけ」と、その活動拠点「ぐんだら家（け）」です。

「ぐんだらけ」は東京藝術大学（以下、東京藝大）と香川大学が共同で立ち上げた新しいまちづくりプロジェクト。住民が気軽に語り合える場をつくり、地域の日常や文化を掘り下げながら、人や町にポジティブな変化を促すことを目指しています。

プロジェクト名は、引田の方言「ぐんだら（＝だたらとおしゃべりすること）」からインスピレーションを得たもの。さらに「〇〇だらけ（集まる）」という意味も掛け合わせ、「ぐんだらけ」として2025年2月に始動しました。

実はこの名前を提案したのは、馬場さん自身なんです！地域文化の空気を肌で感じながら、“人がゆるやかに集まる場”をイメージして名付けたと教えてくれました。「ぐんだら」という言葉が持つ人懐っこさや柔らかさを大切にし、“ぐんだらだらけにしたい！”という想いととも、このプロジェクトが町に“新しい対話の文化”を育てることを願って命名したと言います。

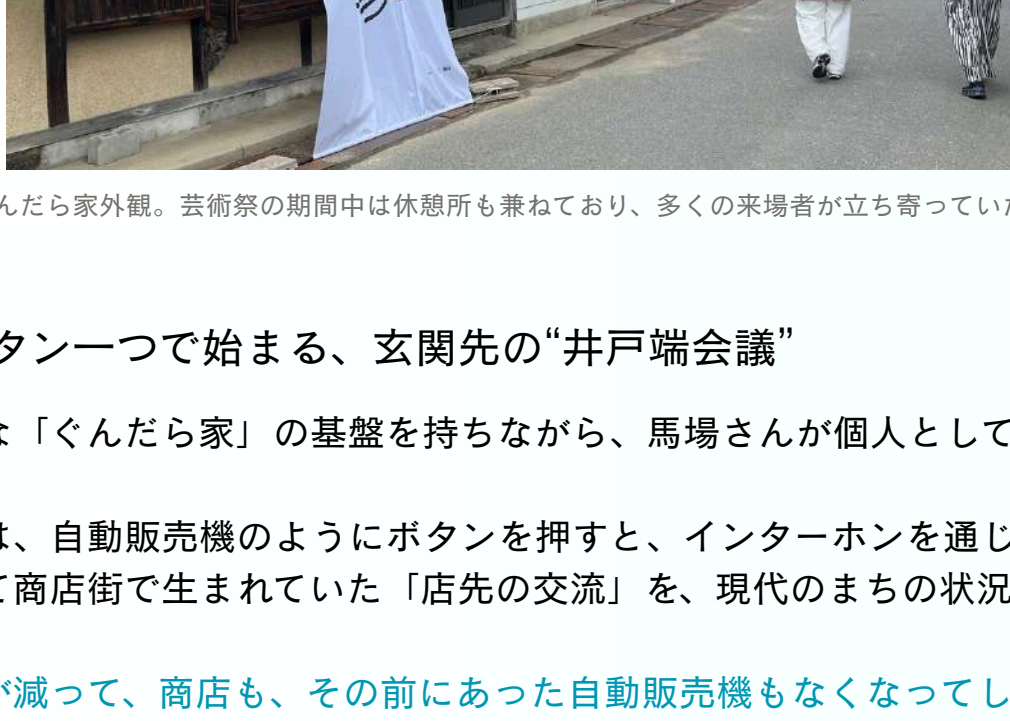
そしてその「ぐんだらけ」の活動拠点として、2025年6月に誕生したのが「ぐんだら家」です。引田の登録有形文化財「松村家住宅」をリニューアルし、2025年の芸術祭の引田エリア公式会場＆企画拠点として機能。瓦屋根や格子戸など往時の趣を残す建物が、今はアートと交流の場に生まれ変わり、過去に賑わった商店街の文化を現代の仕組みで再構築。外から訪れる人と、町の人々が自然に交わる場づくりを進めています。

芸術祭に向けては、東京藝大OBを中心とした3名のアーティストが、地域の人たちと“ぐんだら”を重ねながら作品制作を進めました。さらに住民とアーティストが共同でイベントを運営するなど、“地域に根差した拠点”として息づいています。

馬場さんは現地の責任者として、日々住民の方々やアーティストの方々との対話や打ち合わせを重ね、現場での調整役・橋渡し役を担いながら、この拠点運営やプロジェクトの中枢を支えています。一方で、アーティストとしての自身の挑戦「疑似自販機」プロジェクトも同時に進め、拠点活動と個人活動の両面から、引田に新しい風を届けています。



アーティスト・馬場悠輔さん。地域の人々との協働や、自身の感性を活かした取り組みで、まちの新しい交流をデザインしている。



ぐんだら家外観。芸術祭の期間中は休憩所も兼ねており、多くの来場者が立ち寄っていた。



建物内には東京藝大、香川大学の両校のスタッフが制作に携ったフリーペーパーなどが設置されており、情報拠点としても賑わう。

■ボタン一つで始まる、玄関先の“井戸端会議”

そんな「ぐんだら家」の基盤を持ちながら、馬場さんが個人として注力しているのが「自販機型インターホン」のプロジェクトです。

それは、自動販売機のようにボタンを押すと、インターホンを通じて家主の方とつながる仕組み。かつて商店街で生まれていた「店先の交流」を、現代のまちの状況に合った形で再編する試みです。

「人が減って、商店も、その前にあった自動販売機もなくなってしまった。小さなきっかけを通じて生まれる交流はこの町の大切な文化だったが、今の引田エリアは誰かが商業をすることも難しくなっている。代わりになるようなものを、なにか出来ないか。家に居ながら、商店があった時代のコミュニケーションをもう一度つくりたいか——そう思ったのが始まりでした。」

驚くべきことに、実験機第一号は、住民の方のご自宅の玄関先に設置されています。馬場さんに、実際のお宅の前まで案内していただきました。

「最初に案を持っていったときは、自分でも恐る恐るでした。でも僕が何をしたいのか、どんな目的で挑戦しようとしているのかを詳しく深堀りして聞いてくれて。説明すると、『やるんだったらちゃんとやり！（取り組むなら、とことん追求しなさい）』と言って、玄関先にもともとあったポストの位置すら変えて協力してくれました。」

玄関先に備え付けられた棚にはさまざまな品が並び、ボタンを押せば家主の方が迎えてくれます。

引田エリアでは、市から「休憩所をやってくれるところはありませんか？」と呼びかけがあった際、本当に多くの住民の方々が手を上げたそうです。結果、作品の展示会場よりも休憩所のほうが多いというユニークな状況になっています。

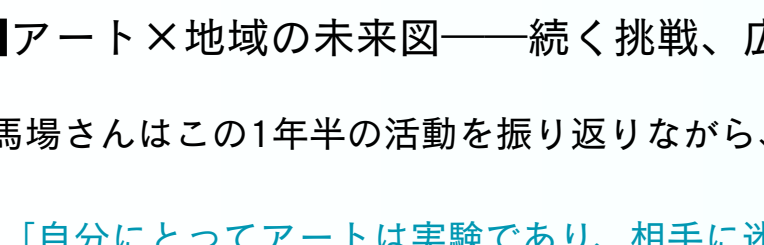
日頃は空き家の建物も、芸術祭のために休憩所になったりと、まち全体に“お接待文化”が息づいているのも特徴です。

「『個人のお宅でお茶を出したりできないか？その対価として、お金はいらないから話す機会や相手が欲しい』というのが、住民側からよく聞く声でした。」

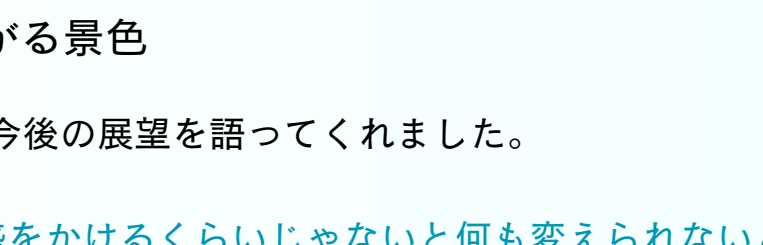
この地域はとにかく自発的で、コミュニケーション好きな方が多い。そしてとても協力的。困っていることがあればすぐ相談に乗ってくれるし、何でも手伝ってくれるんです。今このプロジェクトに取り組めているのも、地域の温かさ、人の繋がりがあったこそ。初めにプロジェクトの相談をして以降、次から次へと縁が生まれ、そのたびに本当に助けられました。」

いくらコミュニケーション好きといっても、鳴らされる側の“受け入れる心”がなければ成立しないこの挑戦。「自身の挑戦は地域の温かさで協力によって支えられている」と、馬場さんは何度も振り返ります。

このインタビュー中も、通りすがりの住民の方が「看板みたいなのが無いと、向こうから作品が見えないなあ」と話しかけていて、すでに馬場さんだけの作品では無くなっている光景を目の当たりにしました。



作品制作に至るまでの経緯を話してくれた馬場さん。言葉の暖かさから、地域への感謝の気持ちが自然と伝わってきた。



地域の方によって設けられた休憩所。馬場さんたちが協力して飾りつけを行う場面に偶然遭遇した。（左）休憩所の窓に貼られたポップからも、ウェルカムムードが伺える。（右）



休憩所の窓に貼られたポップからも、ウェルカムムードが伺える。（右）

■アート×地域の未来図——続く挑戦、広がる景色

馬場さんはこの1年半の活動を振り返りながら、今後の展望を語ってくれました。

「自分にとってアートは実験であり、相手に迷惑をかけるくらいじゃないと何も変えられないと考えているので、“実験”的に挑戦することや、迷惑をかけてでも突き進むことを大事にしています。芸術祭終了後も、「疑似自販機」のシステムを拡大・改良して実際に効果のあるものになるように形を変え、この町にこういうものが文化として根付くことを目指します。」

文化として根付いていけば、来訪者も住民も自然に混じり合い、町全体のコミュニケーションの景色が変わるはず。こういった取り組みをやっている町も、やらせてくれる町も、きつこころらしい。やりたいことと、期待してくれていることがマッチしていて、とてもやりやすい。この先も、地域に根付く形で関わり続けたいと思っています。」

引田の町を活性化させるために、空き家を使ったプロジェクトも計画しているといいます。馬場さんの挑戦は、これからも地域とともに続いていきます。

<アーティスト紹介>

馬場 悠輔（はば ゆうすけ）氏
愛媛県出身、東京藝術大学美術学部建築科卒業。現在25歳。

大学進学以前から農業や漁業など幅広い分野に興味を持つ中で、在学中は総合芸術としての建築の考え方を学んだ。その知識が、現在の作品作りの礎となっている。

卒業後は、「生活の延長線上におかしなことを突っ込む」をポリシーに、“実験的アート活動”を展開する。今後は独立し、大学以外の枠組みとも連携しながら地域とともに活動の続けることを目指している。

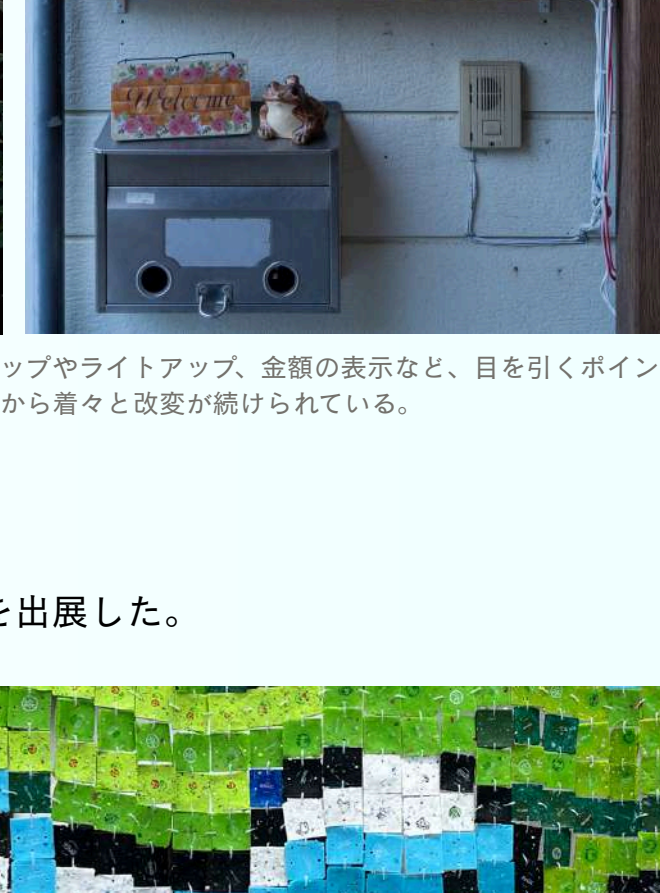
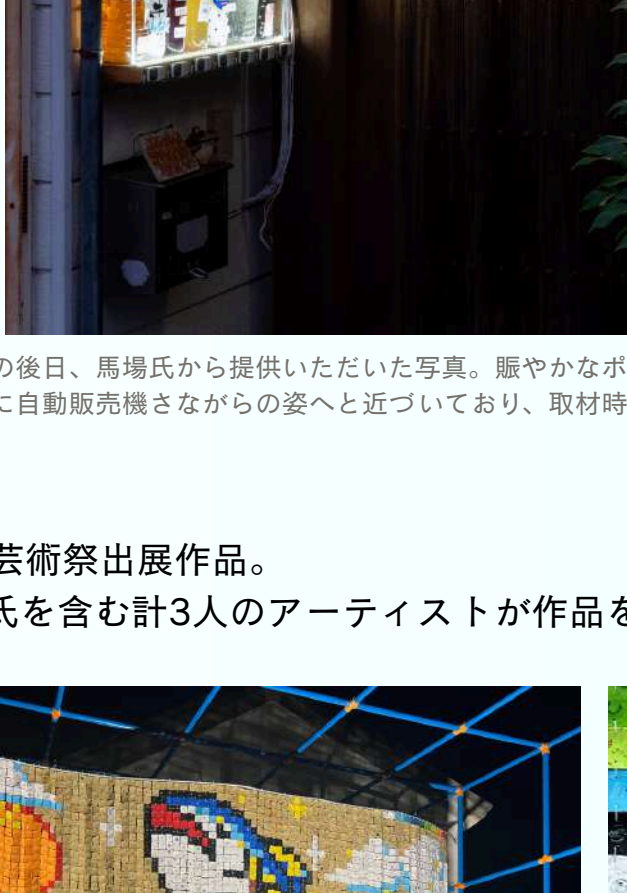
<作品介绍>

馬場 悠輔「Dwell Drink（ドウェル・ドリンク）」
「Dwell Drink」は、馬場悠輔氏が香川県東かがわ市・引田で展開する交流型アート作品。

急激な過疎化により商店だけではなく自販機すら撤退した、経済的に見放されたまちで、貨幣化できない住人の気概を頼りに、売買に代わる少子高齢化社会に合った物の受け渡し方を模索する。個人宅のインターホンに自販機由来の機能を与える。

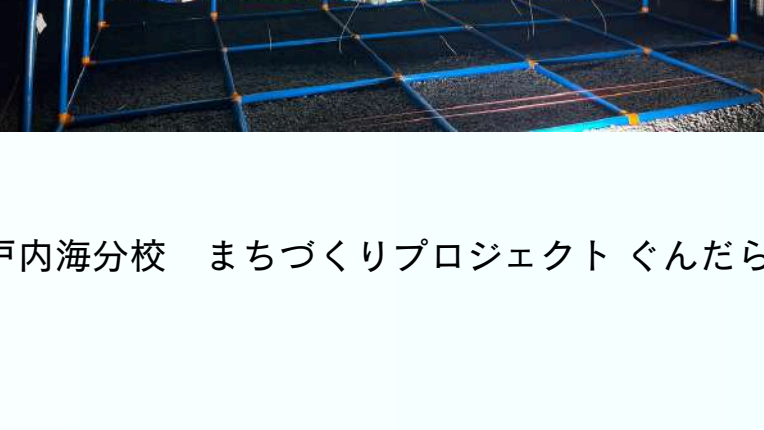
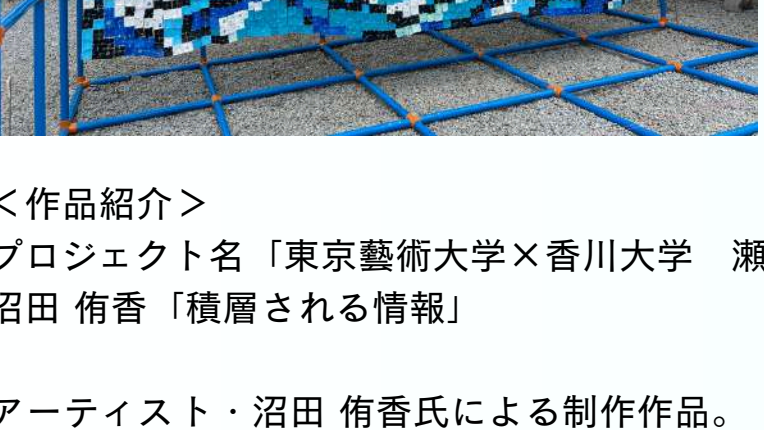
誰でもボタンを押してもいいけど、返事があるかは、あくまで住人の気分次第だ。運が良ければ、お茶に招いてくれるかも！

※画像撮影：日本総陰（一部、馬場氏からの提供を含む）
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



取材の後日、馬場氏から提供いただいた写真。賑やかなポップやライトアップ、金額の表示など、目を引くポイントが増え、まさに自動販売機さながらの姿へと近づいており、取材時から着々と改変が続けられている。

以下は、ぐんだら家に関係したアーティストの方々による芸術祭出展作品。1つ前の記事でピックアップさせていただいた、柴原 寿行氏を含む計3人のアーティストが作品を出展した。



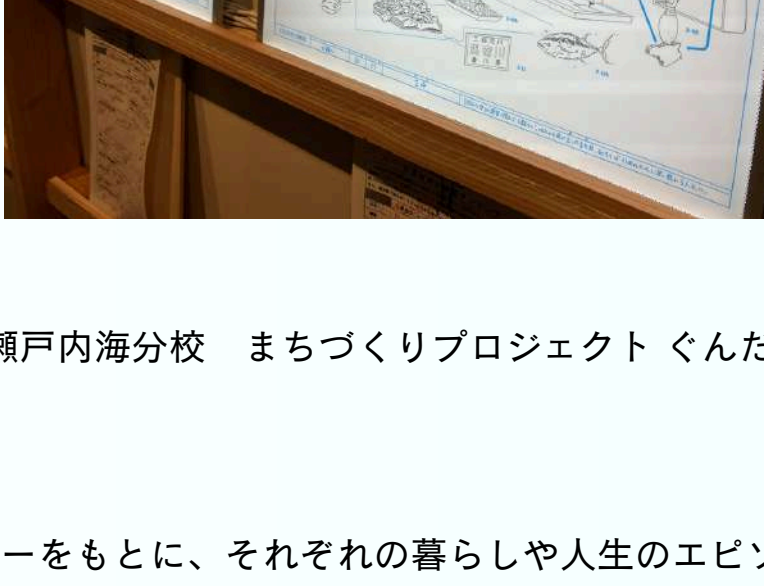
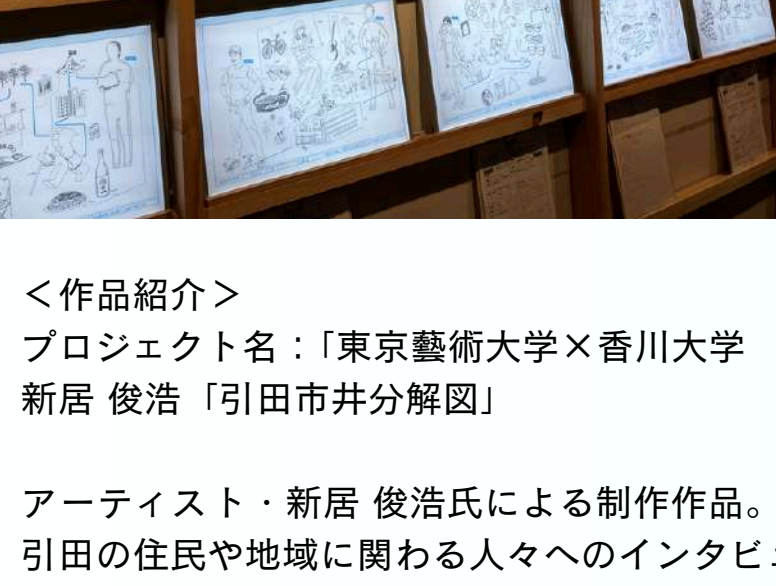
<作品介绍>
プロジェクト名「東京藝術大学×香川大学 瀬戸内海分校 まちづくりプロジェクト ぐんだらけ」
沼田 侑香「積層される情報」

アーティスト・沼田 侑香氏による制作作品。

高齢化や人口減で変化する港町の姿と、通信手段の発展とともに役割を失いつつある大漁旗を重ね合わせ、ペットボトルキャップなどのプラスチックごみを素材に用い、力強く跳ねる魚と海の風景を大規模なモザイク画として表現している。

昼間は色鮮やかに、夜はライトアップにより幻想的な表情を見せる。引田エリアの讃岐井筒屋敷内にて、瀬戸内国際芸術祭2025の夏会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総陰
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



<作品介绍>
プロジェクト名「東京藝術大学×香川大学 瀬戸内海分校 まちづくりプロジェクト ぐんだらけ」
新居 俊浩「引田市井分解図」

アーティスト・新居 俊浩氏による制作作品。

引田の住民や地域に関わる人々へのインタビューをもとに、それぞれの暮らしや人生のエピソードを図解化。一人ひとりの声から立ち上がる日常を可視化し、地域に息づく文化や価値観を浮かび上がらせている。

作品内では、描かれた人の人生を象徴するキーワードがピックアップされ、ポストカードとして展示されている。ポストカードは持ち帰り可能で、鑑賞者は「物語の断片」を持ち帰ることで、引田の町営みをより身近に感じることができる仕組み。引田エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の夏会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総陰
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください